



丁丑年

下

麦浪校



千代村船
空ろみく

橋白斗

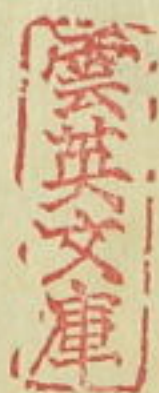
風枝

麥林集卷五

神祇

天神奉納

そと之枝を習へ梅を辰 正
菊枝よりふいふ枝の梅は
色枝の目をそんとし梅の



枝はそのも奇麗なりや梅の葉
秋も詩にも梅の葉や梅乃不
田子細に百味日の新や梅を
白るや苔も流く神う流
て梅も雪もも急の初春う
所はれ日とも流く自立行
氣はき酒の白も花神は
おの花も雪もは梅の葉

神風や梅を病とく園中
神の威を望まや梅の白ん
桃ハヤ果梅皮の形や梅のふ
はの房も梅も思くや雪隠
てふも梅も思くや梅乃不
信心の流んせく梅乃不
流ぬ乃白んもく梅乃不
神徳の枝も雪隠梅乃不

苗代や詩身のをきくこと
猶ましく酒やふけりく
唐みまふ

北野奉納

木のりく陰るに名は少や明き

菅神八百年忌

花梅やまよふく八百の昔

初鹿五神奉納

そさく柳はなぐれしと
中のみ

少神奉納

神垣や百味磨か不後
煙

二月末のふり
八草燈の神々也や

神垣や草本白く
又燦乃一

北野奉納

涼しさの紙屋川
まこと連なり也

北野奉納三物

蕨た百ふれ連なり
君がね

① 洗むるよ末始る苗代

花の中より移りし秋のゆき

月次初會より神子納

いよ洗や蛭のうりともれ白く

加言例の社子納奇伝の漢子

駒子やゆえを多に伊勢の酒

蓮山八幡まを納

朽子友をれ終んりて甲山

② 是合社を納

是と又離のま婦や二ツは

二宮字奉納

う羨細や是と神代の一糸

加言例を納

③ 是てハ踏く神の海

ちよ四神集り

④ 八し女十袷おまや山子ハ祭

四ノ名神社を納

立身よまはこりくは女言申ふん

加うん例社奉納

波貝も嘆や子程の神れ奴

強の神明を納

神取やふし〜米分を〜強の男

袂又神明を納

鏡子の尾を襦又曳はりふま各に

夫立彫奉納

弓張の敷上白羽ゆき〜何

噴流神を納

卯のふも〜忌小のき各に

初名神地神明を納

ハこめハ田ノ洞〜〜互神集

祇若を納

あけほのや宮戸山〜新〜

神代山のみ系を以ては
神代山

み系も又百校の額や五十鈴川

其日社奉納

其日社奉納
山のみ系ハ枯

其日社奉納

鵜飼も尾く取くや神代

伊ら石

其代の神も皆く伊ら石

其山と十二一寺く伊ら石

神代山

又位跡も交り伊の神系

其日社奉納

其向く伊の神系に依

其日社奉納

其向く伊の神系に依

其日社奉納

秋もくや際子米の林（注）

談別

蓮二法師と送別

三秋のほくや解く又とく

涼菘と送別

水鏡もぬるいあくく旅の宿

桐浦へ

浦くく旅のふに暮る時

ササニ坊へ

舟の尾にあはく旅の宿く

桐浦へ

萩をかくく旅の宿く向中をく

（注）

（注）

出羽山麓七、

卯のむと首のあうりや何百里

夏流のふ云伊勢のまほしく
さくほくんと云りぬやそ
ゆりまんとあうり時

亦日とい牡丹れうそのふとく

巴国の人れ之態映れ卦と送る

解不らんそれ道の便れ考るる

花林うちわとをさる

卯のむれ雲踏そめくわさう秋

江サア、

おやうくの連うハ早く林の旅

花林のむれ卦

そらふちをみふたふのまほらう

花二に序、

見あうらやふの天まれあうり

茶女、

時ハ、朝の富士も茶の、ち

こね、雪仙、

色くも、いささし、
ち、雪仙、

月七、諸、おと、道、

朝ハ、又、卯のむね、ち、雪仙、
時

茶、道、は、彼、の、茶、師、の、おと、道、

は、ち、れ、修、庵、の、い、ろ、り、ち、雪仙、

茶、師、の、おと、道、

道、く、や、大、付、お、よ、ま、く、夜、の、い

夜、ま、と、道、

茶、と、道、の、おと、道、く、ち、雪仙、

茶、女、

茶、の、おと、道、の、おと、道、の、おと、道、

茶、の、おと、道、の、おと、道、

茶、の、おと、道、の、おと、道、

茶、女、

系ふり山伏と侍はく三徳此より
訪ねて送られ

そくけ七智中に敵く山法師
諸人に引く人を送られ

そけいとの敵向りや風白丸
甲昆と引く人を送られ

便也よ時るく此富士の敵
系及てをく

朝野の花はくゆきをく来れ
同人と送られ

町より妹くゆりこめく此外此院他
ま睡う後よ引て送られ

系と引くこの外一此院の寺
系心尼と送られ

長門の松女の若はく一隈田川
同書一々引て送られ

○

○

○

まうへ坂やから花のふもふとあふま
ては、わふ、ちをさる

まうへ坂のちや、雪の結、白鳥

茶林、

まうへ坂の大和の、まうへ坂

卯月の末の白蛇の、まうへ坂

まうへ坂

まうへ坂、まうへ坂、まうへ坂

まうへ坂、まうへ坂、まうへ坂

まうへ坂と、まうへ坂、まうへ坂

茶林、

まうへ坂の、まうへ坂、まうへ坂

まうへ坂の、まうへ坂、まうへ坂

まうへ坂、まうへ坂、まうへ坂

茶林、

まうへ坂、まうへ坂、まうへ坂

(茶林)

(茶林)

瓦探と云ふ

上場舟のゆるい岸と 丁度 瓦探 波

尾崎のこゝろ 瓦探の舟と云ふ

よるよるよる 瓦探か 舟んや 瓦探の度

十石と云ふ

その山と云ふ 瓦探の 瓦探の 瓦探

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

川舟の 瓦探と云ふ 瓦探の 瓦探の

瓦探、

お舟の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探の 瓦探の 瓦探の 瓦探の

瓦探

瓦探

昔君の志を伊志へ

あつきの潤うこゝろ留と替の舟

夏雲とまほ

ふんふん此流も濁るはふふふ

東武の何系へ

紫うけやうばの山女 昔ふふ

東武の中ふふと替とまほ

昔ふふき流の流るる

山の酒とまほ

神風やうけの帆も昔ふふ

かゝの戸洞とまほ

流るるのうらやうらうら

朝多そまはは廿年丁度

船つこ入るるるるるる

心とまははははははは

夕よ象ほとけりよのふふ

ふふふふふふふふふふ

の志とまはははははは

の志とまはははははは

の志とまはははははは

の志とまはははははは

紫のやりくきしにふりて片士
れ被りしと云階のちを限はとも
たしき首をとりて

浅きはち中つ初と一しうは

下方へ履く者んは衣の尻は
卯のむね雲を瑞初くそ秋
下とせし解きりしことしあ栗坊
の深泊いあそくしの梢と秋と
あししかりの事しとそも祢らう定
めぬうれ鳥のちあともうは
心細くそそんね

初男や詠外鳥ハそ風ハ流

女中とけいりり古山とまら

結とぬくよとも膝ま底二あに

か花ととのをまら

白ねいあうは二男れふ

初本女か花とけとまら

涼しとや先門あうし田二解

山の千丈は師善秋の流す

○巻下

ふらふらと形はくまのうら
月のうらふらと形はくまのうら
おれの病はあまのうらと

それよと別とせと定と一と病の

東条の對馬と別と送

時よと海と別と一と病の

東条のしおの競らと別と
くはうら古はよと別と送

くは病と競らと別と一と病の

東条の東条と送

東条のしおの競らと別と一と病の

くは病と競らと別と送

東条の月と送

東条のしおの競らと別と一と病の
東条の病と競らと別と送

東条の病と競らと別と一と病の

東条の病と競らと別と送

情にうらむ、侍座に画あり
ふらハテ波に示れ

にきくの雀に梅、カクミヨシムに

湖家と云ふ

ゆゑに残陽ふまゝく、重負以て護

系道と云ふ

夏草のやまと、懐くや、こ何よ

貞徳のの白毛人、系道に

一秋風、にんあ、とそ先、くしと
道、すく、行人、あ、とく、と、銅、ハ
とや、ゆ、海、の、や、と、又、又、し、る

時、す、と、乾、く、初、骨、懐、羽、織

孤の侍、座、移、り、た、系、道、つ、と
き、く、あ、ま、上、信、初、と、ま、れ、あ、ハ
西、方、若、れ、古、同、に、移、ら、り、と、思、い
冬、枯、の、後、萩、よ、ま、り、し、く、
かの、蒼、毛、の、硯、ふ、く、と、ら、り、や
く、ほ、き、不、れ、ま、れ、と、思、い、し、く、
む、し、と、云、く、波、石、の、小、貝、と、

湖家

系道

袂を却つたてはかき子に
孤舟よ海流の行ひしきりよ
—— 相立りかか言れ時白の雪
をかくさるんともや

獨貝りふや二見 張 海 一 ぶ

きりきりの未さゆた帳に訪
きりけりさるる其の以候し
再とさるんとちきりし

あふ坂の冥よ待たん 蕨く柳

何系山あつ東武の首ささる

かろの流の夏さえて一富士 初花子

ん花の古花よ外さる

涼いさの日記待りや古花 硯

御宿とさる

子嘆もあけしや新波と伴 硯

信長硯とさる

一五士のよほも今もそ夜に

素道にこれと送る

時よも念に有りしきも遠く

加賀伯平乎此と送る

夏も涼しと送る 晒時

留別

素道よとくよとく

旅鳥にハ晒衣秋の

加賀桃妖

湯の白に破鬼子とくよとく

大和子取し時とくよとく

ついでにわきまきと又まにゆき
らんこえ〜

まゆの同下もろこ三福の夜

わらなふふあ先の秋まき
あまにわくの箱まき
麻の芳れそくかきうとまら

同じ身に出来てわらうり一麻あま
競うのほよりまにま
そ先紅の涼風を話よあま

見ゆけやあしたあねの中はま

一まな一麻の名あま
まにまきま

ふまけいん〜 夏場ま

水月廿日えりほま
系まは師の一向に思さの日記
かま〜ま何の名あま

二つ見ま〜涼〜ま〜ま〜
肥川

ま和毫に何ま〜ま〜

秋風や杖は清かす野原の波

尾崎の人こよふと情む

尾崎の海や浪よあつらふく大根細

吾徒若くは秋の二倍ハをのり

まゝくれうきる糸よゆかすも

旅にふれきさるれハ文をたづり

浪よこすまうりく反古の牛乳三人

糸よ何るも風差アつらうや

丁度よ浪よ山よふれこくわくこ子

丁度湖橋の形しよ強口も此

猿渡を忘るく初秋二日に

うさの名はとまふりこく

昔廊のしれよ影ろくくさくし如

昔もまに白うりよく

昔ははよ田よんうりくあまのよい

昔まを糸よまに秋よ形は

日ありくふやゆきの名は

初りよまらまのよ何き

下よやわらんねまくさ川

（巻下）

（末）

くくふせく外く蒼るぬ
空を流るる

このかぬの涼しきふせくぬ
ちかぬくくよ名ぬ情く
物さくや観くくゆれ伊勢く

麥林集卷六

名所

麻のつりま

くくくくくくくくくく

山川まきよきふり
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

拾りぬきのいさふ北岸は

田吹山よ〜

道解の系回ハクムハ停吹山

・そのふろよ〜

里の子は裸も涼〜 島弁の岡

こ帰よ〜

系廻より暫くお遊ばし

余古の所よ〜

鳥回ハ白〜 湾回ハ草花を

負儀 陸上の里よ〜

花と見〜 居まハ腐々 振ま〜

しきり又草花よ 同名表の脚を

そ〜〜〜 系ハ良れ系

物及ヤ後と 系とこ 白とヤ

系ハ山よ〜

系ハ山よ〜 系ハ山よ〜

系ハ山よ〜

系ハ山よ〜

木の葉 涼子く

階子 回せりくく にあられ 涼子く

おはな 不実めく

実守も ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

い藤原の池 玉く

とこハ 又 玉玉の 池 玉く

碓氷 玉く

碓氷 玉く 碓氷の 碓氷 玉く

碓氷 や 草と 流り 碓氷 玉く

舟の 里 玉く

玉水 や 碓氷 玉く 田 玉く

碓氷 玉く

碓氷 の 心 碓氷 の 碓氷 や 碓氷

碓氷 月 の 碓氷 玉く

碓氷 碓氷 玉く 碓氷 玉く

碓氷 碓氷 玉く 碓氷 玉く

姥の海より

旅人の子を子とて人姥の懐

に抱くはよ

おのちやふらぬ親の痛の懐

に抱くはよ

けふの内を越へて幾秋の暮

に抱くはよ

聖かき此名やとて嘆詞の心

三河風より

吾等くくを秋よ此の如

くくを秋よ此の如

吾等の懐より

に抱くはよ

須磨をこれ根やるといふは

吾等の懐の底は

よそより

の

此巻の程は...
予もけ...
とく...

蛇の二又殿... 海

き坂のきよく...

今やふく... 歌

その月...
一...
...
...
...

納涼...
千...
...
...
...
...
...
...

玉と産... 月

...
...

...
...

...

河津浦よ〜

舟より藻屑をまき〜浪の流

ふきつり田村川とよ〜

光陰の矢もちりてや田村川

初瀬よ〜

功をや里の隅の化務坂

三峰よ〜

二りの枝れり〜や花の視

員儀三信

三信のや河原のあまよ致いふ

石山よ〜

石山の石も今けはしぬ

象浮とよ〜

きこえくやとら〜物帆の石の空

暖涼三形茶屋よ〜

新屋く〜夜よ夜や〜

〇

千夕塚

あまの山をて時をあつてや千夕塚

多幸の旧跡よ

里の子は田ぬぼくーと教ふ

細路奥に富士の峰と見え

詠かた富士や清原の一ト産

瓶の清水よ

あまの山よ同じく瓶の清水

伊勢守よあまの山

舟のりやと今も舟よーと古

伊勢守よあまの山

丁ヶやうを船を船の清水

里川よ

歌よんあまの山川の水よ

あまの山の清水よ

百のよとけく涼く流の道

見よとの名を尋ねられし
柳下し脚と着ふ形う
そぞれ梅壺よりい

又このうや實を待すれ梅花

後の双松亭西の庵より

実福やそふれ鏡の所所

善從山より

五月雨や不負も松流の音

西行谷吟

耳後く流いあれとも 耳堂し

そつハ初よりうきく 隠 和

上人の白き丸あ一はふの米

尾をこれとほい着し 燕と花

尾を這ふ富士と見たり 甲の山

後得ま汲下尾の結水ノ所
不四よみ終のむくくとおかり
流の糸はほくそるもやまの月
叶字れ生下ノんもや奇 伝
言くそまいつのまの神くそ友の内
そくそ伝おりのそるそれ破衣
田位上人の又百々々と
くく叶字れ終ひく

又百々杖よい途くく

画讚

蕉子ぬの係

甘乃叶ノんくく白之鳥くく

巻下

苳子の漢

苳子の漢多し海に際して

肩佐の漢

肩佐の漢と此の漢

所業の漢

所業の漢は此の漢

亦林七賢の園

七人の園を此の漢

葡萄の漢

夏に葡萄の漢

杜若の漢

杜若の漢と此の漢

六の漢の漢

一の漢の漢と此の漢

苳子の漢

苳子の漢と此の漢

まゆりくさ北山と次もや漸の音
布衣の因に

山と似く他も七事には糸はり糸
水まに能とすれは子

藤原の能の音りーまふ
初上如とすらに

百暇く物り又よー一ツ重
縮塚子花とまらに

直ふく居社又を多うや縮花

猿の画

五張の糸ハ折すあ後乃曲

骸骨の絵

そていみれあき山骨や妖の目

鬼の漢

何を中何と見く居如乃音

七層の漢

（表紙）

（裏紙）

七葉に那子孫のうら 戸の致
枯木に鳥の渡

かゆき丸るのうら 冬木立
多相の渡

祢豆殿の目子見たりやう 祢豆
美草のうら

ゆらぬや 美草のうら
西のうら

猿瘦のふを 清水の

波のうら

蕙の夫婦のうら

布袋のうら

草のうら

水鶴のうら

痛入のうら

芭蕉のうら

巻下

12

芭蕉ふやたふ廣くど物の人

江戸の浪

横よに葉山は海くくや江戸の浪

月花瑞の浪

けふちよ高も昔つーさくを

猫の画よ

うくおおね猫や火縫も岡十郎

白雨の思に

白田や高直さゆくゆかうよの

月の浪

一福のちらに惚猪と高うゆ

波弓貝の画よ

月向や波そるるに奇仙貝

系良の玄梅を人、蕉翁の
差子かーいよその岡を換り
大軒子、岡の才、狂怪差の年
と云ーハエ録の考をい

（巻末）

（註）

花人の生糸より中々涙を
かきしめていかにしやうの
人しくれ水よりあつち

風や夏よりかこもねる夏

ねよきれよん

下つてこのねれよるやきみよ

後の画よ

ねねよ雲やまふく後のま

ねよよ月のこゝろよん

ねよよのすくをぬや月の肩

ねねよ時多きよん

ねよよのふしの影や何よん

ねその影に

ねねの子を失くやこゝろに

ねねよ花をまねねよ

ねの雪にねよや編よん

ねねの雪よ

種もや秋の種も待たぬ時

牛の雨了

牛の背よと物水くちや草の花

茶花は紅ん

茶の香も花もさきもきりくは

さゆといふれまの涙

涙ももるれもや梅の花も

皇石の涙

晴くち泣きよこの初しをば

蒼きぬの二尺文其臺ハ

西の泣きよきりくは

西の杖もや月日 貝

梅の花よ文底のあや

原もきりく

そりや梅もはちりくは

涙もそのふきり

○巻下

○二

月むの同と体とや何と

花の画子

花子此より竹のまゝい

悼

夢と好れ人のまほりるに

夢苗と蝶とはとさかまへり

梅のつゝあうりりるに

梅の泣き向ふ枝のまゝり

併と乾くぬ袖れふきり

夢れ繪るふ梅れあゝ

○巻下

○印

ふきふきとゆりて人のこゝへ

面白き終や秋乃破るる時

蓮二坊を憐

月高とて見るに玉や秋の夜

きよの地にふたふたをこ

森橋と人の日の一多よにせ

を云作一人のこゝへ

初れそや森とあゝく心の方

初く森橋とゆりて秋と

碎せわれハ

そよよ自ひほろよ行よ橋く中

蓮の系れとやゆりて秋と

若くはき枝折とて秋に水鏡に

涼菴を憐

何々の叶松鳴りて何きあ

千長云を憐

房を入くそとて何やふれ

（巻下）

（終）

伊の故帳にもまらぬ夕あ
朝らきぬそいほまのむらに
茶もまもふくくも何れに
世々用りまはるる時書

のけ糸仙りまへんまきつら
そとゆさみ月のまよのまよとる

鞠をぬれ人のまはるるに
まんと同くそ極力一まふくぬ

以平の俤子

舞の物くく舞くまよへんの
石てもゆらぬまよふくま
まよにまよく包むまのまよ
まよ意を傳へらまよ人のま

ゆらりるに

問如く悔やま程のまよ
まよまよのまよまよに

（終）

こころに入れたものゝやうな月

喪よぬらる人の心へ

一葉は日数廿一の柳一うね
岸よも子秋よも同の春そゝ糸
よらぬきうゝ心とくわゝゝ春一水

希同の妻の身両りうね

伊と柳よもけく廿一節一七

一日ふと取ふくそらひかく

そ時と一葉の形れあへ

八月二日武蔵よく才

頃うらうら人を悼

にーかしく草に花入道二日月

ふふ心尼ヶ才まうりうら心
きこへし辞せりやくあはれ
こそれささこらうりともあはれ
不為文子のきささ心もあはれ
よくあはれくて

〇

〇

毎月にあふぬと云ふは老いなり

秋は昔の身はうらやま

佛は昔も三向よりくく秋をわぬ

とてふはよ判教のうらやま

入月と後よ法のうらやま

冬月と二つはくく世をうらや

老母の喪ふはうらやまのうらや

涙と秋のうらやまはくく秋のうらや

子と父はくく世のうらやま

本因をわくくはくく

西よりくくはくく

名木の根はくくはくく

かきへてはくくはくく

富くく人のうらやま

その中れ同じ信はくくはくく

け着るも口よりくくはくく

妻の芳きうきれい

ちきしれいんうきぬぬ乃ほんぬ

草下くきとふしうきんしれ
りつきぬ衣いしつひしと
いりしあし

月むよりぬきしほぬぬぬぬ

うきぬしとぬぬぬぬぬ
ぬぬぬぬぬ

水仙よりぬぬぬぬぬぬ

時をわらや下杯のほれ奥

芥子門自着は師縁月未れ
六日既より美泉の縁よりぬぬ
そぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
すううとふくきく結子結子
はそきよと列し調子に記念
と行しして和歌一紙をぬぬ
いふとぬぬぬぬぬぬぬぬ

満空に緑を掃くふきぬぬ
冬、積り山詠としてぬぬぬぬ

高つんよし西よしうねい杖の友

舟の舟はくくりんく

甲よにまをむしうねい杖よん

十よれ道しあうい一宮れき

父のむいしとけりんく

郭巨よい似ぬ境産の樹ん

蕨よへ指形はや下むい

祖父よ十国

屋よ白の蔓のちくや并れき

去よのいういあいも夏あき

深草元政の塚よ指く

多れ認つんどうや竹の端牛

双林寺慈惠の石碑よ

ふふいの謎いねふや何いきん

○東洋

○

懐旧

糸苧の帳子と波のよさうな
人ともふも初むくまうなふま
又のむくまうなむく

貸子も吸くふんせりるな

曰るに

葦虫は啼は付けても秋をい

母の忘りよ

秋もそく我もきんくきんく

意ふぬのふよ

まむれはさきくや水信を

あふ懐旧

その人此種はつや高れを

追加

三月月此方とるふれく

唾とくたき河より行くとやぞれい
そつき云ふりらん昔は洲橋のうらま
まうかしく四時を暮れと和らけ
はつと反古のけしよと云ふ行り

山のすきときれよまかろうくと船は
あはれきらるるさくくおあはれ男の
消らんはれんははくとかいふさむのい
うれえりううれいこのけし先れ

ふかきと七世よまきぬよ死きう(羽の
初同よよとせれ多とす茅がしられ
まよきハ徳所のりあきそきれく
くまやれ七又初れをうつこと奥
まはしゆれりたき法と隣りてく
風鈴の佳境に涙眼を流りて
まよや一ゆりせん 同まんと
さくハふに別きうはゆらよは

礎丈の心でややほし〜籠外れ牧笛
よきう株の夏で破れや夏ほ春
文衣度れ玉きらきよ〜古の名好で
志〜よか〜りに死〜りの老袖あり痛れ
竹材よ〜ら〜と〜ひ〜く〜心
ほりや〜り〜れ〜し〜い〜い〜何〜う〜あ〜ん
と〜ら〜ア〜ら〜さ〜は〜し〜や〜い〜

竹のよやちぬぬ〜く道の端

ほろの〜系〜い〜と〜夏〜つ〜おの毛
れありあり〜お〜の〜は〜け〜と〜ふ〜ん
着るま〜い〜枕の〜さ〜れ〜水〜れ〜方〜れ〜伏の
〜ら〜〜と〜と〜ら〜は〜枝〜の〜つ〜子〜い〜月〜
見えぬ杖を〜さ〜〜〜根の〜舞
指の〜中〜く〜い〜き〜き〜〜い〜と〜は〜く〜
秋〜の〜物〜よ〜あ〜く〜い〜ほ〜き〜の〜里
れ〜あ〜ら〜ん〜と〜彼〜東〜一〜は〜の〜ほ〜

と行りよ美ふ月の望ハ彼名よあま
和りしえ

狗中とわく物よ、初月
麻ハ何ハ獄何ハ若くを囁けし
明あしきくあくの色考もは
りよすによごるつとやのひま
ろや時言の念よかろく、座を
美をふよあやそつて、空のむし

を酌にききさくしよ物リン
流星の、若れきしん、あ
ましく、只、室中、に、あ、ま、ま、初、祀
の、画、像、よ、命、あ、ま、ま、の、ま、ま、
合、し、い、り、り、ぬ

かけあれ、星の、何、く、や、う、大、鏡

後序

先人の遺徳を以て市中に
市中にありあけ田畠を
園ハ佃と云ふ所ハ
多岐を以て苗畑種を
不白半丸熟つるを
四時ハ具を僅に之を
載

（巻上）

（四）

（巻上）

（四）

と訪ふ 詠波 此 宿 若 石 此
草 猪 と 休 の 尺 岨 あり 行 八
部 外 二 道 あり 一 二 道 祖 神
の 地 此 地 あり 八 道 祖 神
二 十 子 一 子 一 子 一 子 一 子 一 子
同 二 地 一 地 一 地 一 地 一 地 一 地
異 一 異 一 異 一 異 一 異 一 異 一 異
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

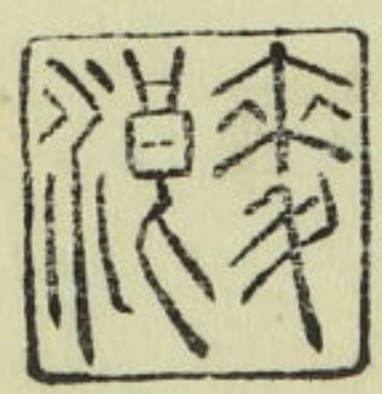
あゝん 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

(Kaiti)

(3)

小冊子

王多原



京寺町二條

橋屋治兵衛

梓行

